

音楽教科書における発問・指示に関する一考察 ——第1学年の他教科の教科書との比較を通して——

尾見 敦子*

A Consideration for Proper Questioning and Instructions in Music Textbooks Comparing to First Grader's Textbooks of Other Subjects

Atsuko OMI

要 旨

教科書における発問と指示の良し悪しは、「音楽に対する感性」を育て、「音楽活動の基礎的な能力」を培う、という音楽科の目標の達成を左右する。教科書を児童の音楽的成長を促すものにならなければならない。本稿をそのための研究の第一歩と位置付け、第1学年の国語、算数、生活、音楽の教科書における発問と指示の比較考察を行った。

発問と指示は、もともとは授業において、学習者の思考の深化や、行動の変容を意図して教師が行う、重要な教授行為を指している。図書という形態をとり、児童に意図的に働きかける教科書において、発問と指示は、教科書を構成する骨格を成していると言えるだろう。

国語科、算数科、生活科の教科書を分析した結果、発問・指示のありようは各教科の固有性を反映してさまざまに異なっていること、教科書が児童に向かって「問う」発問や、「働きかけ」る指示は、言葉、絵や写真、図表のほか、単元の構成や配置等、様々な表現形式に依ることが明らかになった。音楽教科書における発問と指示を検討した結果、読譜教育の方法論の不在に起因する問題は今後の課題であること、歌や鑑賞曲の挿絵をどう描き、どのような言葉を添え、どのような情報を盛り込むかは、音楽表現・音楽鑑賞の質にかかわる重要な問題であることが明らかになった。

他教科の教科書の分析で得られた知見をもとに、音楽教科書に書かれた（描かれた）視覚情報が、「音楽に対する感性」や「音楽活動の基礎的な能力」の育成に、本質的な部分で合致しているかの検討を、今後、6学年にわたって行い、改善を図っていく必要がある。

キーワード：音楽教科書、発問、指示

*教授 音楽教育学

I. 問題の所在

本稿は、音楽教科書が、児童の「音楽に対する感性」や「音楽活動の基礎的な能力」の育成（音楽科の目標）によりよく寄与するためには、教科書における発問や指示がどうあればよいのかについて考察することを目的とする。

小学校学習指導要領は音楽科の目標を次のように定めている。

「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」（文部科学省 2008a, p.7）

したがって教科書の記述は、「音楽に対する感性」や「音楽活動の基礎的な能力」に寄与することが求められていると言ってよいだろう。

算数教科書は学習のポイントが明確であり、用いられる言葉も絵もシンプルで見やすいつくりになっている（後述）のに対して、音楽教科書は、言葉は冗長で、絵も整然としていない。「まふらあをしているしろくまさん」（図1）という言葉と絵を用いたリズムの説明（リズム絵）は、児童の「音楽的概念の形成」に役立っているとは言い難い。「音楽に対する感性」の育成はリズムを始めとする、音楽を構成する諸要素の知覚や概念の形成を基礎とするのであり、こうした教科書における発問の妥当性が検討される必要があるだろう。

国語教科書も音楽教科書も、目次が「活動文」で書かれている。国語教科書では、児童への指示の言葉は、言葉を「ききましょう」「よみましょう」「かきましょう」と、シンプルで明確

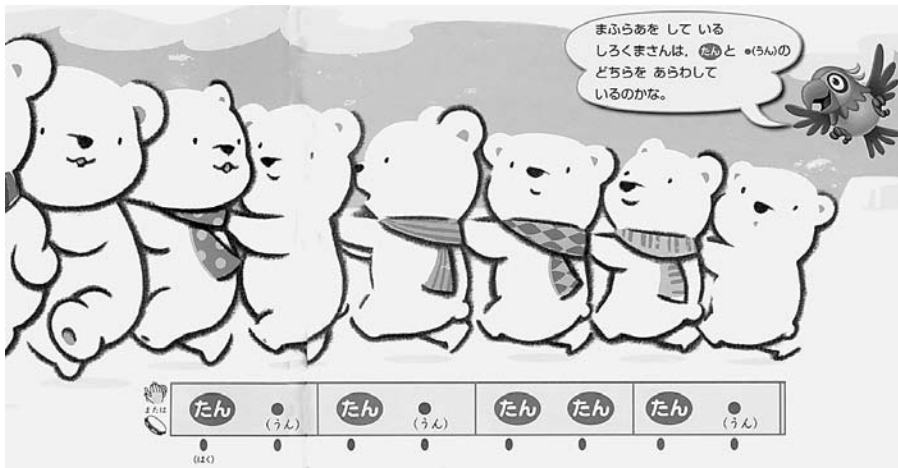


図1 リズム絵（教育芸術社，第1学年，pp.18-19）

である。活動文が国語科の内容の柱である「A. 話すこと・聞くこと」「B. 書くこと」「C. 読むこと」(文部科学省 2008b)に対応している。一方、音楽教科書の目次に現れた活動文(表1)は統一感がない。「楽しくドレミ」「いい音見つけて」「ようすをおもいうかべよう」と異なる文体が混在し、意味が明瞭でない。「うたでなかよしになろう」「よびかけっこでなかよし」「みんなで歌って音楽なかま」(傍点, 引用者)では音楽は手段であるが、「音楽づくりを楽しもう」(傍点, 引用者)では表現領域の分野名がそのまま用いられている。また、「楽しむ」「親しむ」という活動文がかなり多く、主観的な活動が推奨されている感がある。このような言葉の使用は、音楽の学習内容を児童にはわかりにくいものにしてしている。音楽教科書において児童に対して語りかけられる言葉を、音楽科の内容の柱や、児童の言葉の理解の視点から見直す必要があるのではないだろうか。

杉江(2012)の調査によると、小学校教師の9割が「ほとんどすべて」または「ほぼ」教科

表1-1. 目次の構成
(教育芸術社, 第1学年)

No.	各課のタイトル
1	うたでなかよしになろう
2	はくをかんじとろう
3	はくにのってりずむをうとう
4	けんぱんハーモニカをふこう
5	いろいろなおとにしたしもう
6	ようすをおもいうかべよう
7	おとのたかさにきをつけてうたおう
8	たがいのおとをきこう
9	おんかくをたのしもう

表1-2. 目次の構成
(教育出版, 第2学年)

No.	各課のタイトル
1	よびかけっこでなかよし
2	ことばでリズム
3	楽しくドレミ
4	いい音見つけて
5	おまつりの音楽
6	ようすを音楽で
7	みんなの音楽パーティー

表1-3. 目次の構成
(東京書籍, 第3学年)

No.	各課のタイトル
1	みんなで歌って音楽なかま
2	リコーダーをふこう
3	ふしのとくちょうをかんじとろう
4	身体とリズムでたのしもう
5	かさなりをかんじとろう
6	日本の音楽に親しもう
7	音楽づくりを楽しもう
8	音楽会をひらこう
9	音楽の森

書に沿って教えている (p.30)。したがって、教科書における発問と指示の良し悪しは、音楽科の目標の達成を左右すると言える。教科書を児童の音楽的成長を促すものにしなければならない。本稿をそのための研究の第一歩と位置付け、第1学年の国語、算数、生活、音楽の教科書における発問と指示の比較考察を行うこととする。

Ⅱ. 教科書における発問と指示

発問と指示は、もともとは授業において、学習者の思考の深化や、行動の変容を意図して教師が行う、重要な教授行為を指している。本稿では同様の意味でこの用語を用いている。教科書は教科用図書であるゆえに、教材の提示、問いかけ、説明等において、おのずと発問や指示が行われるからである。図書という形態をとり、児童に意図的に働きかける教科書において、発問と指示は、教科書を構成する骨格を成していると言えるだろう。

ここで発問と指示についての定義を確認しておきたい。発問とは「授業の中で教師が児童生徒に対して問いかけること、およびその問いの形式と内容」である (横須賀 2003, p.589)。発問は大きく2種類に分けられ、第一の発問は「最初に発せられる課題を持った発問」、第二の発問は「目の前の子どもの発言に対して即時的に発せられる発問」である (宮坂 1978, p.521)。教師と児童の会話が双方向である授業とは異なり、教科書における発問は児童への一方向であり、第一の発問にあたる。この発問は「子どもの思考活動を刺激し、子どもから多様な考えを引き出し、子どもが教材と切実に関係する契機を与えるだけの力」をもたねばならない。そしてその「発問の力は教師の教材解釈の深さに大きく依存している」のである (宮坂, p.521)。一方、指示とは、児童生徒の「授業における態度・行動の変容を意図」してなされるが、命令・管理ではなく、「思考の質的変容と発展を目指す教師の働きかけ」を指す。「学習内容の重点事項」「学習上のねらいや手順」「自己評価の観点」などについて、教師の適切な「指示」が必要とされる (今野 2003, p.349)。

以上のことから、本稿では、教科書における発問を、児童に「教材と切実に関係する契機を与えて、思考活動を刺激する、問いの形式と内容」、指示を児童の「思考の質的変容と発展を目指す働きかけ」と定義する。

Ⅲ. 音楽教科書を構成する学習内容

音楽教科書はたんに教材の楽曲が載っているだけではない。1教材は見開き2ページで扱われ、挿絵や写真で色彩豊かに彩られている (図2)。「～をしよう」という音楽活動のねらい (図

2, 左ページ)と音楽活動の手順(図2, 右ページ)が示されている。歌唱・器楽の表現教材は、歌詞、曲のイメージを伝える挿絵と写真(図3), その曲の関連情報、絵譜やリズム譜、歌い方や楽器の伴奏のヒントなど、様々な情報(発問や指示)が載せられている。鑑賞教材も同様



図2 見開き2ページの構成(東京書籍, 第3学年, pp.18-19)



図3 歌詞、曲のイメージを伝える挿絵と写真(教育芸術社, 第2学年, pp.36-37)

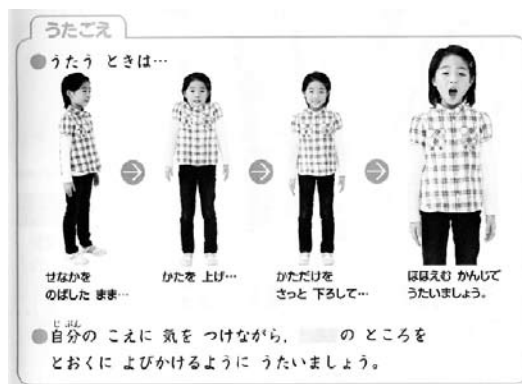


図4 歌唱法（教育芸術社，第2学年，p.17）

に、曲のテーマや曲想を表した絵や写真、リズムや旋律の要素や楽曲の構成に気付かせる発問や図解（図2，右ページ），用いられる楽器の写真や楽曲に関する説明（図2，左ページ）などが載せられている。

歌唱法を独立させたコーナー（図4）もあり、鍵盤ハーモニカやリズム楽器，リコーダーなどの奏法（図5，図6）のページもある。

さらに、小学校学習指導要領の改訂（平成20年）で「音楽づくり」と〔共通事項〕が新設され、「言語活動の充実」が求められ、これらすべてが1冊の教科書に盛り込まれるかたちとなった。

「音楽づくり」は、「声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること」（第1・2学年）、「さまざまな発想をもって即興的に表現すること」（第3～6学年）、「音楽の仕組みを生かして音楽を作ること」（全学年）が求められている（文部科学省2008a，pp.96-97）。音楽づくりのポイントは即興性にあるが、教科書にはそれに沿って行える「手順」が示されることになるのはいたしかたないことであろう。音楽づくりの掲載例を挙げる（図7）。

〔共通事項〕は「それのみを扱うのではなく、表現及び鑑賞の各活動の中で扱うもの」で、具体的には①「音色，リズム，速度など音楽を特徴づけている要素」，②「反復，問いと答え，などの音楽の仕組み」，③「音符，休符，記号や音楽に関わる用語」である（文部科学省2008a，p.5）。いずれも鳴り響く具体的な音響（つまり，表現と鑑賞の音楽実践）とともにあるので、「表現及び鑑賞の各活動の中で扱う」という原則のとおりであるが、教科書への実現は容易ではなく，至難である。教育出版は，〔共通事項〕の①と②（③は従来から扱われているので）をまとめた関係図を，6年生の教科書の巻末に掲載している（図8）。しかし，この図において，「音楽のもと」，「料理でいう材料のようなもの」という比喩は妥当であろうか。破



図5 鍵盤ハーモニカの奏法（東京書籍，第1学年，pp.24-25）



図6 リコーダーの奏法（東京書籍，第3学年，p.10）



図 7-1 音楽づくり① (東京書籍, 第1学年, pp.40-41)

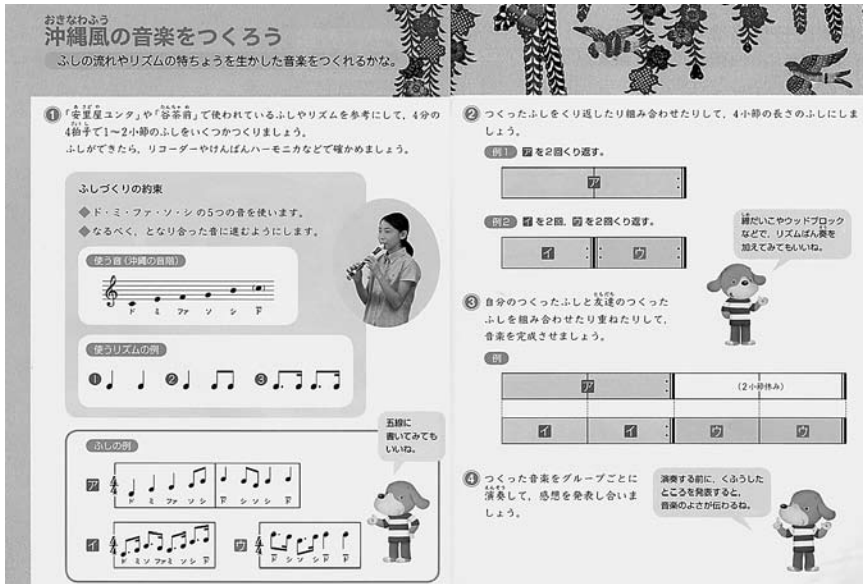


図 7-2 音楽づくり② (東京書籍, 第6学年, pp.26-27)

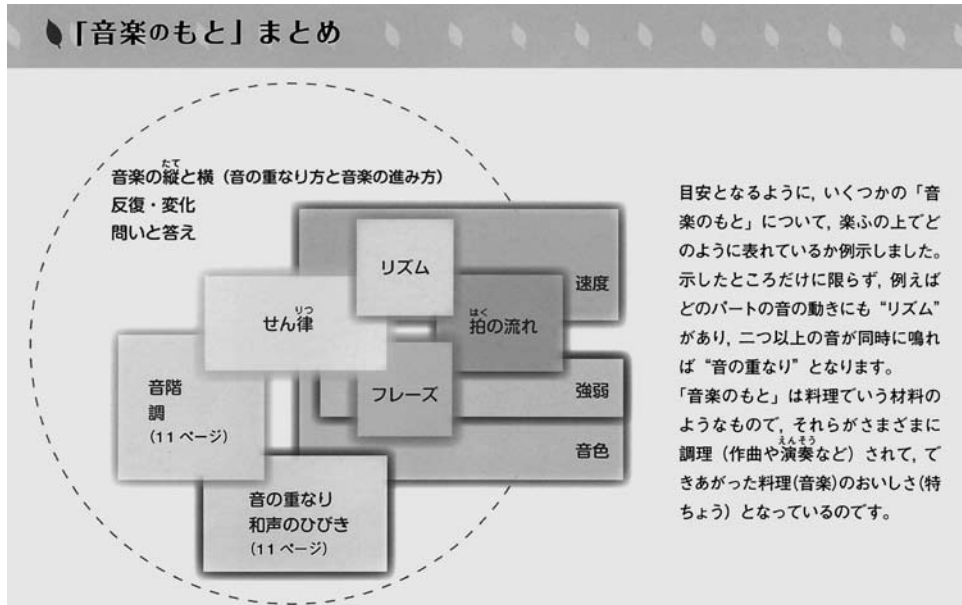


図8 「音楽のもと」まとめ（教育出版，第6学年，p.65）

線の大円と上下・左右・前後に配置された四角形によって描かれた関係図の作図の根拠は不明である。

「言語活動の充実」は「音楽科改訂の要点」の第7項目として挙げられている（文部科学省2008a, p.6, 下線は引用者）。

鑑賞領域の各学年の内容に、感じ取ったことを言葉で表すなどの活動を位置付け、楽曲や演奏の美しさに気が付いたり、楽曲の特徴や演奏のよさに気が付いたり理解する能力が高まるよう改善を図った。これは受動的にありがちであった鑑賞の活動を、能動的で創造的な鑑賞の活動にできるように改善することを意図したものである。

これを受けて、教育出版は、鑑賞曲を聴いて「気づいたこと」「感じ取ったこと」を教科書に書くコーナー（図9）を4年生から設け、鑑賞の単元を「音楽のききどころ」と名付けている。図9では、左欄に「せん律の特ちょうや組み合わせ、使われている楽器の音色、強弱や速度の変化など」の「気づいたこと」を書き、「この曲の良さや面白さを友達に伝えよう」という指示がなされている。

しかし、限られた授業時間で「聴いた後に書く」ことに目標が設定されていると、書くための鑑賞になりやすく、文章力に左右された活動になってしまう。図9の右欄、すなわち「ふん

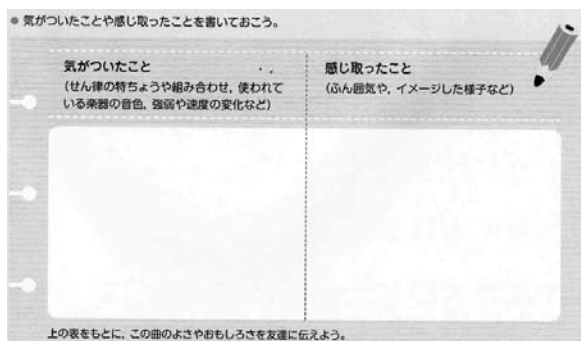


図9 鑑賞における書く活動（教育出版，第6学年，p.26）

囲気やイメージした様子」を書くことやそれにもとづいて話すことは「言語活動」を充実させるが、小学校では、むしろ国語科で音楽鑑賞を用いて行うのがふさわしい。教科の連携の発想こそが求められるのではないだろうか。

音楽教科の固有性から言えば、小学校で鑑賞と結びつけるべきは音楽「表現」（歌唱や身体表現）であって、「言語」表現ではない。鑑賞した音楽の聴覚的印象を言葉で書くこと自体に限界がある。「言語活動」によって、「受動的にありがちであった鑑賞の活動を、能動的で創造的な鑑賞の活動にするように改善する」（前出）ことは、音楽の固有性に照らせば無理がある。「音楽言語」のリテラシーが高まれば鑑賞は能動的になるのである。「音楽に対する感性」や「音楽活動の基礎的な能力」の育成こそが先であろう。

「音楽科改訂の趣旨」の「(ii) 改善の具体的事項」には次のように書かれている（文部科学省 2008a, p.4, 傍点と下線は引用者）。

（ウ）鑑賞領域においては、音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組みを聴き取る力を育て、それによって音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにする。さらに、鑑賞領域と表現領域の指導内容との関連が明確になるようにする。

つまり、「鑑賞領域と表現領域の指導内容との関連」こそが、先ず、教科書に実現されなければならない。そして、そこには適切な発問と指示が設定される必要がある。発問は「子どもの（音楽的）思考活動（「音楽の面白さや良さ、美しさを感じ取る」）を刺激し、子どもから多様な考えを引き出し、子どもが教材と切実に関係する契機を与える」（宮坂，前出）ような「問いの形式と内容」を備えていなければならない。「学習内容の重点事項」「学習上のねらいや手順」「自己評価の観点」などを提示する指示は、「（音楽的）思考の質的変容と発展を目指す働きかけ」（今野，前出）でなければならない。

以上述べてきたように、現行の音楽教科書は多くの学習内容から成っている。そして、音楽科の固有性に関わる本質的な部分で検討の余地を残した学習内容も含まれている。

IV. 他教科の教科書における発問と指示

発問・指示の形式や表現法は各教科の固有性を反映している。そのことを1年生の他教科の教科書を例に見てみよう。

算数は、「明確な言葉」に依る発問が不可欠な教科である。数学的概念の獲得は、「ひろさ」「かさ」「なんばんめ」「あわせていくつ」「ちがいはいくつ」といった言葉の使用なしには学べない。1年生の児童はまず数学的概念を直感的に理解し、それを表す記号（「0, 1, 2…」や「+, =, -」）を知り、その読み方（「れい・いち・に…」「たす・は・ひく」）を学ぶ。

『たのしいさんすう』（大日本図書）の、第1課「1から10までのかず」では、1から10までの数を学んだ後、一番最後に「0というかず」を学ぶ（p.19）。1ページの紙面は「①発問 ②概念の提示 ③練習」から成っている。「0（零）」の概念をどのように児童に獲得させるか見てみよう（図10）。まず「いくつでしょう」という言葉で問う（発問）。クマとりんごの絵が「0

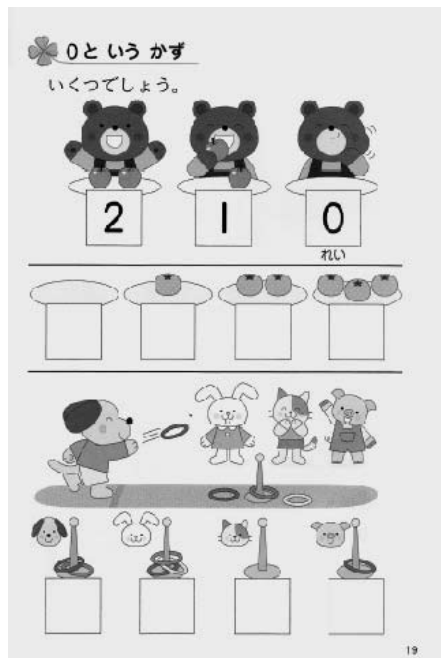


図10 「0というかず」（大日本図書、第1学年、p.19）

(れい)」という数の直感的理解を助けている。「0」という数の概念を提示し、「0」という記号と「れい」という読み方を提示する。みかんの絵と動物たちの輪投げの絵は、練習問題である。みかんの絵には、もうクマはいない。「リンゴを食べる」という行為なしに、数だけを理解する。まとめの練習問題も、言葉に拠らずに絵（輪投げの絵）で指示している。絵は言葉より雄弁である。1年生に絵で発問、指示することは発達段階に適っている。

1年生の算数の教科書はカラフルで楽しい雰囲気であるが、あくまでも白地がベースで、色彩のトーンは淡いパステルカラーでまとめられている。言葉と記号は黒に統一されている。数字は太字で大きく、「0」という数の概念を学ぶこの課では、四角囲みで示されている。輪投げをする動物のイラストの大きさは適度で、細い線でくっきりと描かれ、すっきりとした印象を与えている。

発問と指示の表現形式に着目しよう。1年生の算数の教科書では、絵と言葉と記号（数字）を組み合わせた発問と指示によって、児童の数学的思考を刺激している。そして、絵と言葉の用いられ方に周到な配慮が見られる。つまり、数字は黒字で、太く、大きい。絵は数学的思考から逸らすことのない色彩、タッチ、大きさである。言葉の使用はこれ以上削れないほど、必要不可欠のものだけである。「思考の質的変容と発展」を目指して働きかける練習問題は、絵という表現形式を活用している。

国語は言葉を学ぶ教科であるから、教科書の紙面の中心は教材文の「言葉」である。国語科の目標は次のように定められている（文部科学省 2008b, p.18）。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力、および言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

1年生の教科書を見ると、この目標の達成のために、教科書を言葉の学習に焦点化する紙面づくりが図られていることがわかる。教科書（教育出版『ひろがることば しょうがくこくご 1上』）に書かれた文字は、4月当初はサイズがとても大きく（28ポイント）、文字数はとても少ない。しかも、初出は第1課「なかよし」のページを2枚めくって現れる、「とれるかな」の5文字である。お話のあらすじはこうである。動物たちがボール遊びをしていたら（見開き2ページの1枚目、言葉はない）、ボールが逸れて海の方に飛んでいく（2枚目、言葉はない）。そのボールを海にいるイルカたちが取ろうとするが（3枚目「とれるかな」）、イルカは取りそこなってしまう（4枚目「あれあれ」）。すると、クジラが潮を吹き、虹がかかり、虹の滑り台を滑ってボールが陸の動物たちの元に戻る（5枚目「みんななかよし」）。

お話の絵が「とれるかな」の言葉とともに、言語的思考を刺激する発問や指示の機能を果

たしている。児童たちは登場人物の動物たちに代わって「とれるかな」と言ってみたり、取れるかどうかの予想を口々に話すであろう。教科書の第1ページから、「話題に沿って話し合う能力を身に付け」「進んで話したり聞いたりする態度を育てる」という第1・2学年の目標（文部科学省 2008b, p.18）をふまえた紙面づくりになっていると言える。言葉の学習が、児童の言葉を引き出すことから始まっていることも重要であろう。その際に絵の果たす役割は大きい。

第2課は、見開き2ページに、さまざまな挨拶の場面を想起させる8つの挿絵（中心に、教室で教師と児童があいさつする場面）と、「あいさつ」の4文字が書かれている（図11）。あいさつは、指導する言語活動の一つとして挙げられている（「ウ 場面に合わせてあいさつをしたり、必要なことについて身近な人と連絡をし合ったりすること」（国語科の「内容A 話すこと・聞くこと」文部科学省 2008b, p.19）。

国語科で育てる「話すこと・聞くこと的能力」として「ウ 姿勢や口形、声の大きさ」が定められており、それに対応するページが「あいうえお」のコーナー（図12）である。

ここにも言葉に拠らない発問と指示が見られる。ページの右半分に、2音節の言葉の絵（アリ、犬、馬、駅、鬼）が描かれた円が縦に並び、左半分に、「あ」「い」「う」「え」「お」の文字が添えられた、アイウエオの発音の口形（児童が発音している）写真が、絵と対応して縦に並ぶ。この絵と文字と写真の配置自体が「指示」であり、「発問」である。アリの絵は、「これ

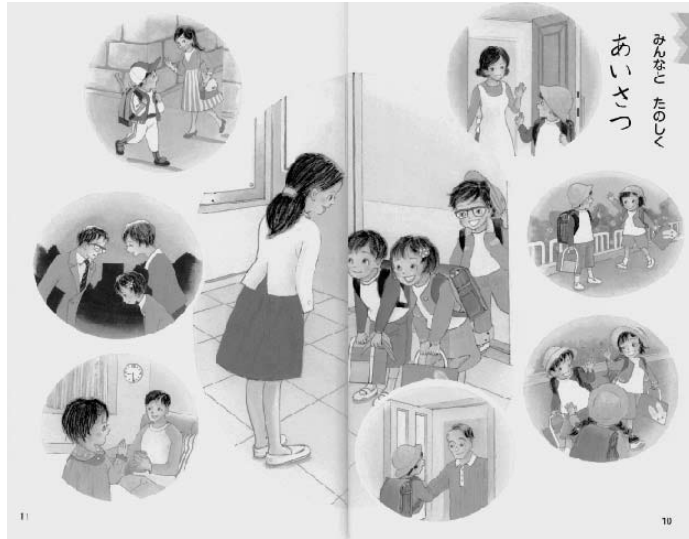


図11 「あいさつ」（教育出版，第1学年，pp.10-11）



図12 「あいうえお」(教育出版, 第1学年, p.16)

は何でしょう」と問い、「始めの音を発音してみよう」と指示する。口形の写真は、「まねして発音しましょう」と指示し、「アイウエオの口形はどのように違いますか」と問うているからである。児童は絵を見て「あり」「いぬ」を想起して発音する。単語の第一音をア、イと発音し（口形の写真）、それを「あ」、「い」と書く。言葉に依る冗長な指示は、1年生には無益で無用であろう。

第3課「おはなしたくさんききたいな」(p.20)には、「ぐりとぐら」など、一見してお話が想起される絵本の挿絵が描かれている。第4課「はなしましよ、ききましよ」(p.28)は、教室で児童が会話する場面を描いた挿絵と、発話の実例が書かれている。挿絵は、そこに書かれた言葉がどのような状況で話されたかを説明するとともに、同じような場面で会話をしてみましょう、という指示にもなっている。

第5課「たのしくよみましょう1」の教材は、まどみちおの「あいうえおのうた」、第8課「たのしくよみましょう2」の教材は、まどみちおの「がぎぐげごのうた」、第13課は「おおきなかぶ」である。物語や詩に描かれた挿絵は、作品を「楽しく読む」ことを助けている。どのページにも絵が多く描かれているのに、すっきりとしているのは、挿絵の大小のバランスを考えた



図13 「なにがかくれているのでしょうか」(教育出版, 第1学年, pp.54-55, p.57)

配置, 挿絵の色使いと色調のセンスのよさが相俟って, 白地に黒の文字を引き立てているからではないだろうか。文字の多いページには白の余白を広く取り, 文字への集中力を高めている。言葉の学習に焦点化する紙面づくりが一貫している。

科学的題材による説明文では, 写真が効果的に用いられている。第10課「なにが, かくれているのでしょうか」では, 鮮明で美しい拡大写真が紙面の3分の2を占めている。ページをめくると, 尺取虫の部分がもっと拡大写真で現れる(図13)。

写真に助けられ, 「ばらのきに, なにかいます」「なにが, かくれているのでしょうか」「しゃくとりむしが, かくれているのです」という, 3文から成る説明文の文型を, 楽しく音読しながら, 理解・感得することができるだろう。第二連はコノハチョウである。コノハチョウの鮮やかな隠れ方を写した写真とともに「かれはのなかに, なにかいます」「なにが, かくれているのでしょうか」「このはちょうが, かくれているのです」(傍点, 引用者)という, 尺取虫と同型の3文と, 「はねをとじると, かれはとそっくりになります」という第3文を補足する文が続く。そして第三連のまとめの一文, 「じょうずにかくれることのできるむしは, ほかにいろいろいます」で締めくくられ, オオカマキリ他5つの虫の鮮やかな隠れ方を写した写真が添えられている。このように, 写真の大胆な使用が, 説明文の学習の効果を上げている。

生活科の教科書(信濃教育出版社『せいかつ上 あおぞら』)は絵と写真と文を組み合わせた紙面構成である。さまざまな事柄・事物が, 所狭しと描かれ, 文字もかなり多いのに雑多な印象を与えないのは, 見開き2ページのテーマが明確で, 白地に, 写真と挿絵が調和的に組み

合わされているからであろう。本教科書は、1年1組のさとこさんとまことさんが案内役となっていて、このクラスの児童が生き活きと生活科の学習に取り組む様子が、ページを追って描かれている。この編集方針が、一冊を通して統一感を与えていると言える。どのページにも多くの児童が登場し、グループで協力して、一人一人が目的をもって生き活きと活動している様子が、センスの良い筆致と色彩で描かれている。生活科の学習内容の情報を盛り込みつつも、主人公は事物ではなく子どもたちである、というメッセージが感じられる。

生活科の学習の場面は、通学路、教室、校庭、学校内のいろいろな場所、地域、家庭、自然豊かな野外、と児童の生活圏である。自然観察、植物栽培、小動物の飼育、年中行事といった複数のテーマが、半年間（上巻・下巻）の時間軸で同時進行する。したがって、紙面には複数の場面の挿絵が描かれ、大小取り混ぜた複数の写真が各所に挿入され、複数の登場人物の発話（発見、感じたこと、驚き、等）が吹き出して付き、植物観察（朝顔の種まきから種の収穫まで）や飼育日記（①かたつむりの採集・飼育・産卵まで、②ウサギやヤギを飼う相談から譲り受けて飼育が始まるまで）や、折々のクラスの話し合いの内容等が、写真や挿絵で差し込まれている。

生活科の教科書は、児童を取り巻く生活環境・自然環境に着目させ、そこで感じたこと、気づいたことを意識化させ、さらなる探求へと導く働きを持っている。生活科の教科書において、児童に問かける言葉（言葉に依る発問）は、言葉の総量から見て、非常に少ない。「どうしてしょうぶゆにはいるの」（p.27）、「朝顔の種を植えるのに土を掘るのは）このくらいでいいかな」（p.29）、「（ウサギやヤギを）かうことができるかな」（p.36）、「なにをたべるのかな」（p.40）、「きょうはどの月がみえるかな」（図14）のみである。これらは、言葉に依らずには問うことができないものである。

そして、言葉や問いの形式に拠らない形で、「子どもの思考活動を刺激し、子どもから多様な考えを引き出し、子どもが教材と切実に関係する契機を与えるだけの力」をもった発問や指示（前出、宮坂、p.521）が、教科書の至る所にある。たとえば、「かたつむりの飼育」（全5回）の単元（テーマ）は、かたつむりを見つけて喜ぶ子どもを描いた挿絵から始まる（図15）。1ページの左下6分の1を割いたコーナーに、児童の顔が大きく描かれている。児童の顔に比べると超拡大と言える、実寸で角が1センチの、かたつむりの拡大写真が効果的に配置されている。第2回の挿絵には、教室で、この挿絵の児童の手に乗ったかたつむりに人垣ができ、かたつむりがどこにいそうかを話し合う様子が描かれている。そしてクラスのみんなが校庭でかたつむりの採集を始める（第3回の挿絵、図16）。

「はるがいっぱい」（pp.18-23）と「まぶしいなつ」（pp.48-55）は、季節の変化を学ぶ単元で



図14 単元「月のかたち」における発問（信濃教育会出版部，第1学年，p.73）



図15 単元「かたつむりの飼育（第1回／全5回）」（信濃教育会出版部，第1学年，p.35）



図16 単元「かたつむりの飼育（第3回／全5回）」（信濃教育会出版部，第1学年，p.39）

ある（図17）。学校の近くの「いつものばしょ」と「さんぼみち」が、それぞれ、見開き2ページ、見開き4ページで描かれる。「さんぼみち」は一幅のパノラマ写真のような挿絵である。そこには数多くの動植物の挿絵と写真が挿入されている。「春との夏の違いは何だろう。絵の中の違いを見つけよう」と言葉で問いかけたりはしない。「いつものばしょ」「さんぼみち」というタイトルが書かれるのみである。1年生の児童は春と夏の挿絵を見比べては、嬉々として様々な細かな違いを発見し、実体験と結びつけるであろう。教師が、この挿絵から幾通りもの発問

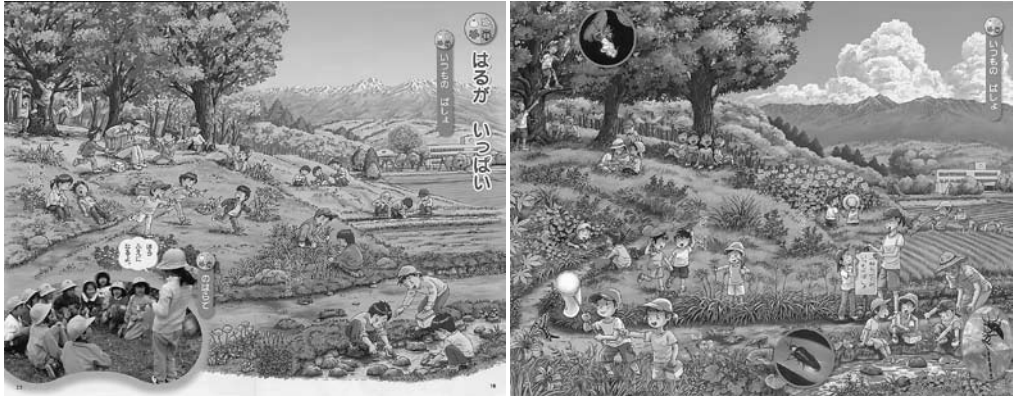


図17 「いつものばしょ」春(左)と夏(右)(信濃教育会出版部, 第1学年, p.18, 23, 50, 55)

や指示を作り出すことができるという点でも, 優れた教科書であると言える。

以上, 見てきたように, 教科書の様相は教科の違いによってずいぶん異なり, それは各教科の固有性を反映している。また, 教科書が児童に向かって「問う」発問や, 「働きかけ」る指示は, 言葉, 絵や写真, 図表のほか, 単元の構成や配置等, 様々な方法に依ることが明らかになった。つまり, 教科書とは, 言葉・挿絵・写真・図解等の表現形式を駆使して考案された, 児童が各教科に固有の「教材に切実に関係する契機を与えて, 思考活動を刺激する, 問いの形式と内容」(発問)と, 児童の「思考の質的发展を目指す働きかけ」(指示)が各紙面に縦横に巡らされたものであることがわかる。

IV. 音楽教科書における発問と指示

我が国の現行の音楽教科書は, 発問と指示に依って, 児童に「音楽教材に切実に関係する契機を与えて, 音楽的感性と音楽的思考活動を刺激」し, 児童の「音楽的感性や音楽的思考の質的发展を目指す働きかけ」を行っているだろうか。教科書に書かれた(描かれた)視覚情報が, 「音楽に対する感性」や「音楽活動の基礎的な能力」の育成に, 本質的な部分で合致しているだろうか。視覚情報とは, 言葉, 記号, 挿絵, 写真等を指す。この問い自体がこれまで, ほとんどなされてこなかったのではないだろうか。本稿の冒頭に挙げたように(p.90), 『『まふらあをしているしろくまさん』が『たん』と『うん』のどちらをあらわしているのかな』(図1)と問い, 「たん」を表していると答えさせることは, 音楽的概念の形成に, 遠回りであるばかりか間違った方法である。1拍の音価(「うん」=リズム唱)あらわす記号(リズム符)こそ

を教えなければならない。次のページの「ぶんぶんぶん」(pp.20-21)では、「つぼを1個もっているはちさん」(傍点, 引用者)が「たん」を表している, と気づかせようとして、「つぼもっているはちさんともっていないはちさんがいるよ」と問うのである。同じ音価(4分音符)を, 曲ごとに違う, 歌詞のキャラクター(しろくまさん, はちさん)に還元させるやり方は, リズムの概念形成とは逆の方向である。このような, 音楽科の固有性を損なう, 初歩的な間違いを含む発問と指示に対して問題提起がなされずにいることは, 我が国の学校音楽教育における読譜教育の方法論の不在を意味している。この問題については別稿ですでに論じている(尾見 2009, 2010, 2012)ので, 本稿では, 歌唱や鑑賞において, 児童に対してどのような言葉かけがなされ, 視覚情報が与えられているか, そして, それが「音楽に対する感性」や「音楽活動の基礎的な能力」の育成に, 本質的な部分で合致しているかについて, 事例を挙げて, 問題提起としたい。

1年生の歌唱共通教材である《かたつむり》《うみ》《ひのまる》では, 児童に次のように呼びかけている(表2)。

この歌を歌う5月ごろ, 国語科では児童が声に出して読む文字のサイズは28ポイントで, 15字程度であるのに対し, この文字数はサイズは12ポイントで50字もあるので, 児童が積極的に読もうとする文字環境であるとは言い難い。書かれた内容にも疑問が残る。かたつむりの挿絵は「ふしぎなかたち」, 「あめのひのかたつむり」, 「なぜかうれしそう」であるようには見えない。「よびかけています」の主語がないので, 不完全な文章である。《うみ》において, 「このうたのように, みんなのゆめもひろがる」というのは飛躍しており, 「ゆめもひろがるといいですね」は歌詞の内容から逸れている。《ひのまる》で, 「くにはたをみてうれいきもちになる」と方向づけることは, 適切とは言えない。

《かたつむり》では, 挿絵と写真の合成による, 次のような視覚情報が与えられている(図18)。3人の児童がかたつむりを覗き込んでいる。2人の児童が傘を持っている。その傍らに, 「きょうは, あめがふりました。あじさいのはのうえに, かたつむりをみつけました」という

表2 四角囲みで示された児童に呼びかける文章(1年生共通教材:教育芸術社)

かたつむり (p.13)	「ふしぎなかたちをしたかたつむりによびかけています。あめのひのかたつむりは, なぜかうれしそうにみえますね。」
うみ (p.25)	「ひろひろとしたうみをみると, ころろがわくわくします。このうたのように, みんなのゆめもひろがるといいですね。」
ひのまる (p.45)	「すぼおつのたいかいやおりんぴくなどで, わたしたちのくにはたをみると, うれいきもちになりますね。」



図 18 教育出版：《かたつむり》の挿絵と写真の合成 (pp.10-11)

絵日記（挿絵）がある。右ページは同じ3人の子どもたちが、歌詞が中に書いてある紫陽花の絵の後ろから、こちらに向かってポーズをしている。

「かたつむり」の歌を歌うのに、見開き2ページいっぱいの、不自然で大がかりな合成写真が必要であろうか。左ページ上に「どんなかんじてうたおうかな」という13文字が曲線を描いて並んでいる。「どんな（※緑色で）かんじ（※紫色で）…」と2色で色分けされている。この「発問」の扱いはほとんど絵と同じである。右ページ下には小さい文字で「かたつむりさんによびかけるようにうたおう」（傍点、引用者）という「答え」が書かれているので、発問の意味をなさない。「かたつむりさんによびかけるようにうたおう」という表現は幼稚であり、この「指示」内容は小学校における音楽の学びではない。

《うみ》も《かたつむり》も幼稚園で習った歌である。これらの歌唱に対する「指示」は以下のとおりである（表3）。

「はくのにって」（拍の保持）は音楽的要求にかなっていない。他は、体を揺らしたり、景色を思い浮かべたり、と歌唱とは別のことをするよう促しており、音楽理解には向かわない「指示」となっている。《うみ》と《かたつむり》は曲想が異なるが、教育芸術社の「指示」は同じである（表4）。それよりも、問題なのは、「はく（拍）」の概念がまだ教えられていないにもか

音楽教科書における発問・指示に関する一考察

表3 1年生の共通教材《うみ》の歌唱に対する「指示」

教育芸術社 (p. 25)	「はくにごって、からだをうごかしながらうたいましょう」
教育出版 (p. 24)	「きよくにあわせて、からだをゆらしながらうたってみよう」
東京書籍 (p. 19)	「けしきをおもいうかべながらていねいにうたいましょう」

表4 1年生の共通教材《かたつむり》の歌唱に対する「指示」

教育芸術社 (p. 13)	「はくにごって、からだをうごかしながらうたいましょう」
教育出版 (p. 11)	「どんなかんじでうたおうかな」(左上)「かたつむりさんによびかけるようにうたおう」(右下)
東京書籍 (p. 11)	「かたつむりによびかけるようにうたいましょう」

表5 3年生の共通教材《うさぎ》の「指示」
(①歌唱に対する指示 ②挿絵 ③歌についての説明)

教育芸術社 (pp. 30-31)	①	日本に古くからつたわる歌のふんいきを味わいながら歌いましょう。
	②	月とうさぎの絵(※月を見て跳ねるうさぎ、うさぎが餅つきをするような模様の月)、十五夜のお供えの写真
	③	「むかしの人は、月にうかび上がるもようを、うさぎがもちをついている様子にたとえて、お月見を楽しんでいました。この歌はそんな人々のくらしの中から自然に生まれてきました。」
教育出版 (pp. 26-27)	①	せんりつの小さなまとまりを生かして、お話しするように歌おう。
	②	月を見て跳ねるうさぎ
	③	お月見のお話「昔のこよみで8月15日(今の9月から10月ごろ)には、きせつの草花や作物、おだんごなどをかぎって、美しい秋の月を見ることが楽しまれてきました。」
東京書籍 (pp. 24-25)	①	月を思いうかべながら、うさぎに話しかけるように歌いましょう。
	②	月(中に歌詞)、跳ねるうさぎとススキ
	③	なし

かわらず、指示の言葉に書かれていることである。

3年生の歌唱共通教材である《うさぎ》では、3社とも、月を見て跳ねるうさぎが挿絵に描かれている(表5)。

東京書籍には「お月見」(「中秋の名月」)への言及がない。「うさぎに話しかけるように歌いましょう」という指示は、3年生には幼稚である。1年生の「生活科」で十五夜と秋の七草を

尾見 敦子

学習している（図14）ことをふまえた有益な情報をもっと盛り込まれてしかるべきであろう。同様のことが2年生の歌唱共通教材《はるがきた》の挿絵にも言える。「生活科」では1年生の初めに野外に春を見つけに出かける。3社の挿絵や写真は、同じ見開き2ページに描かれた「はるがいっぱい」の挿絵（図15）に比べてずいぶん見劣りがする。逆に言えば、「はるがいっぱい」の挿絵は、春の訪れを児童に発見させ、自然の中での実体験に結びつける力を持っており、2年生の終わりに歌う「はるがきた」の挿絵にふさわしい質を備えていると言えよう。

このように、歌や鑑賞曲の挿絵をどう描き、どのような言葉を添え、どのような情報を盛り込むかは、音楽表現・音楽鑑賞の質にかかわる重要な問題である。

国語科、算数科、生活科の教科書の分析を通して明らかになった知見をもとに、音楽教科書に書かれた（描かれた）視覚情報が、「音楽に対する感性」や「音楽活動の基礎的な能力」の育成に、本質的な部分で合致しているかの検討を、今後、6学年にわたって行い、改善を図っていく必要がある。

引用文献

- 尾見敦子, 2009, 「提言『読譜教育』の4つの視点」, 『音楽教育実践ジャーナル』, vol.7 no.1, 76-85.
尾見敦子, 2010, 「小学校におけるリズム教育の出発点—日本とハンガリーの音楽教科書の比較を通して—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第21巻第2号, 1-18.
尾見敦子, 2012, 「なぜ音楽の授業で読譜力が養われないのか—ハンガリーの音楽教科書が語るもの」, 『音楽教育実践ジャーナル』, vol.9 no.2, 58-66.
今野喜清, 2003, 「指示」, 『新版学校教育辞典』, 教育出版, pp.349-350.
杉江淑子, 2012, 「音楽科教育と教科書—教師にとっての音楽科教科書」, 『音楽教育実践ジャーナル』, vol.9 no.2, 30-37.
宮坂義彦, 1978, 「発問」, 『教育学大辞典』, 第一法規, pp.520-521.
横須賀薫, 2003, 「発問」, 『新版学校教育辞典』, 教育出版, p.589.
文部科学省, 2008a, 『小学校学習指導要領解説 音楽編』
文部科学省, 2008b, 『小学校学習指導要領解説 国語編』

文部科学省検定済教科書 平成23年発行

『小学生のおんがく1』『小学生の音楽2』『小学生の音楽3』教育芸術社

『おんがくのおくりもの1』『音楽のおくりもの2』『音楽のおくりもの3』教育出版

『あたらしいおんがく1』『新しい音楽2』『新しい音楽3』東京書籍

『ひろがることば しょうがくこくご1』教育出版

『たのしいさんすう1』大日本図書

『せいかつ上 あおぞら』信濃教育会出版部